

長野

長野県高山村のJA須高りんご部会高山支部は、家庭の生ごみなどから作る堆肥（たいひ）で土づくりをし、害虫防除に性フェロモン剤を使うなど、減農薬・減化学肥料栽培

培に取り組んでいる。昨年、支部員全員がエコファーマーになった。資源循環型農業を掲げる村で、独自ブランド「信州高山さわやかりんご」の定着に力を入れている。

JA須高りんご部会高山支部 生ごみ堆肥を活用

村ぐるみで資源循環



共選所で「信州高山さわやかりんご」を運ぶ西原支部長（右）ら

堆肥による土づくりや、環境に配慮した栽培方法を取り入れたのは、他産地との差別化やブランド化が狙い。同村のリンゴは色つやや味が良いと評価が高く、その基盤をさらに強化したものだ。支部長の西原灌雄さん（65）は「慣行栽培に比べ、畑の地力を保つ効果は大きい。減農薬・減化学肥料栽培は当たり前のことだ」と自信を見せる。

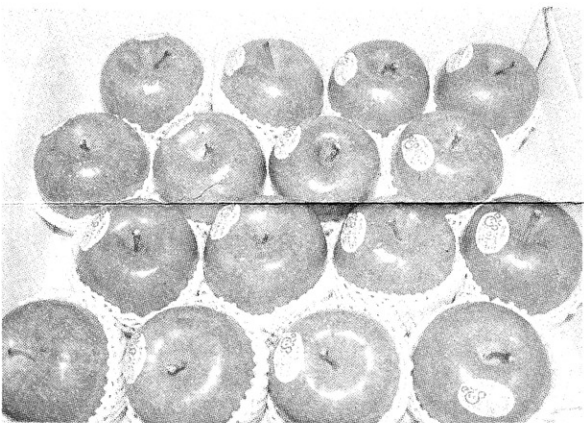


高山村は長野県北東部、群馬県との境にある。人口約8000人。標高4300〜7500級の冷涼な気候を生かしてリンゴ、ブドウ、ワイン用ブドウなどの栽培が盛んだ。山田温泉などの信州高山温泉郷や、俳人小林一茶が晩年に頻繁に足を運んだゆかりの地としても知られる。今年、村制施行50周年を迎えた。



村の施設で製造する良質な堆肥

堆肥は、村が1982年に建設した堆肥化施設で造る。各家庭は生ごみを分別、水切りして村が指定する紙製の「生ごみ専用袋」に入れて出す。村が回収し、袋のまま堆肥化施設に持ち込む。施設で



とびっきりりんご

市場を通して出荷される普通の「信州高山さわやかりんご」とは別に、贈答用として人気なのが「とびっきりりんご」だ。直接注文を受け付け、大玉の完熟品を選んで専用の箱に詰めて出荷している。このほかに低糖度のシャムも製造し、直売所で販売している。

まじいり 込めて

児童にも人気

高山村学校給食センター栄養職員の武田美鈴さん

高山村のリンゴは他産地のものと比べて色鮮やか。シャキッとした歯応えも良いですね。秋、冬とさまざまな品種を供給してもらい、給食に彩りが出ます。ほかの地域産だと給食にリンゴを出しても残す子もいるのですが、高山村産ではほとんど無し。やはりそれだけ親しみが深いのだろうな、と感じています。

エール

リンゴは村の主力農産物だ。支部員244人で約80畝栽培する。品種は「ふじ」「つがる」「玉王林」や「シナノスイート」など。店頭でのちらし配布などで「クリーンなリンゴ栽培」をPR。JA共選所前での直売や試食宣伝会、村内の学校給食への供給もしている。エコファーマー認定を弾みに、一層の飛躍を目指す。

は、村内の酪農家から出る牛ふんや農業集落排水処理場の汚泥、きこの農家から集めたおが粉など、こもりに発酵させ、良質の堆肥に仕上げる。昨年度は生ごみ約360トンを原料として使用。牛ふんも約990トンの使用。堆肥約340トンをJAを通じて農家に販売した。久保田勝土村長は「畜産農家らを含め村民の協力で、非常によくかみ合った資源循環が実現できている」と語る。

91年からリンゴコカクモンハマキ、キンモンホソガなどの防除対策に性フェロモン剤を導入し、減農薬に取り組んでいる。性フェロモン剤を使わない園地のリンゴは荷受けしない。2004年から色や形による選果基準を3段階から4段階に増やし、品質向上を図っている。